

イタリアを統一した男 ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世 イタリア

イタリアは古代ローマ帝国のイメージが強いが、ローマ帝国＝イタリアではない。イタリアが近代国家として成立したのは、1861年に「イタリア王国」が誕生した時に始まる。そう古い話ではないのである。

かつて広大な地域を支配した古代ローマ帝国は、395年コンスタンティヌス帝の時代に西と東に分裂した。西ローマ帝国は476年に異民族の侵入等で滅び、一方の東ローマ帝国はコンスタンチノーブル現イスタンブールを首都にその後1000年続くが、1453年オスマントルコによって滅んだ。

長靴の形をしたイタリア半島は、中世の頃にはヴェネツィア・フィレンツェ・ピサ・ミラノ・ジェノア、ナポリなど多くの小国がオーストリア、スペイン、フランス等を後ろ盾に互いに覇を競いあっていた。

19世紀になるとイタリア半島には、サルディニア王国、3つの公国（パルマ、モデナ、トスカーナであるが君主はすべてオーストリア王室）の他、教皇領とオーストリア軍が駐留しているナポリ・シチリア王国があった。今日の北イタリアのヴェネツィアやロンバルディアは、当時オーストリア領であった。

会議は踊ると揶揄されたウィーン会議を主催したオーストリアの丞相メッテルニヒは「イタリアとは地理的名称にすぎない」と看破している。

真っ白な山上の町ミハス（スペイン）、青色の町シャウエン（モロッコ）、文字通りのカサブランカ、チュニジアの純白の町シディブ・サイド、マルタの首都バレッタの蜂蜜色など世界には町全体が一つの色で統一されたところがある。

古都ローマの色は茶系であるが、そのど真ん中に非常に目立つ白亜の巨大な建造物が聳えている。茶系を基調とするローマにあって白色は周りとはそぐわない色彩と映るが、これがイタリア統一を成し遂げたヴィットーリオ・エマヌエーレ2世を讃える「ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念堂」通称ヴィットリアーノなのである。



ローマ市内にそびえる白亜のヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念堂

ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世（1820年～1878年）は、ヨーロッパ屈指の名門貴族であるサヴォイア家が治めるサルディニア王国の国王でありイタリアを統一し、イタリア王国をつくり上げた人物である。

当時オーストリア帝国への反発は強く人々はイタリアの統一を渴望していた。統一にとって外国とりわけ絶大な力を備えていたオーストリアの支配を取り除くことは必須要件であった。

そしてサルディニア王国はオーストリア軍と戦争をした。

戦争終結後、父王カルロ・アルベルトから王位を譲られたヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世は多くの課題を抱えながらサルディニア王国を背負うこととなった。因みにイタリア統一運動をリソルジメントと言う。



ジャニコロの丘にある国王像



巨大なヴィットリアーノ

ヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世は外交手腕に優れた通称カヴール（=カミッロ・パオロ・フィリッポ・ジュリオ・ベソン伯爵）を宰相に任命し、紆余曲折を経ながらローマとオーストリア領であるヴェネツィアを除き、全イタリア半島を統一し 1861 年イタリア王国の初代国王に推され即位した。

イタリア王国成立後もオーストリア領となっているヴェネツィアを自国領としたいがためプロイセン王国（=現在のドイツ北部およびポーランド西部）がオーストリアと戦った時、イタリア王国はプロイセン側につき勝利し見返りにヴェネツィアを獲得した。

またティロルおよびトリエステにはイタリア人が多く居住していたがイタリア王国はその併合を目的に第 1 次世界大戦時には連合国側に組みし、目論み通り自国の領土とした。



さらにプロイセンがフランスと戦った時（1870 年）にも、プロイセン側につき勝利しローマの後ろ盾であったフランスが敗走したので念願のローマを手中にして王宮をクイナーレ宮に定めた。因みにクイナーレ宮は現在もイタリア大統領府となっている。

ヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世は、1878 年イタリア統一を果たし 57 歳の生涯を閉じた。そして古代ローマ帝国の遺跡である 2 千年前の大建造物パンテオンに葬られた。

ヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世を語る時、忘れてはならない人物が二人いる。一人は優れた外交手腕を持ち宰相を務めた

パンテオンに祀られ

カヴール、もう一人はジュゼッペ・ガリ

バルディである。

カヴール（1810 年～1861 年）は優れた外交手腕を発揮しイタリア統一に多大な役割を果たした。カヴールはイタリアを統一するためには外国の支援が欠かせないとみて、その一つの手段としてフランスにニースを割譲することを密約しフランスの軍事的援助をえた。

1859年フランスと組んでオーストリアに宣戦布告し統一へ向けて歩を進めるも、フランスのナポレオン3世がオーストリアと単独講話を結ぶにおよびサルディニア王国は南のロンバルディアとパルマを領有できたにとどまった。カヴールはその責任を取って丞相を辞任するに及んだが、フランスのとった背信行為は人々の気持ちを統一へ向けて一層駆り立てることとなりカヴールは復権している。

当時イタリア王国はイタリア半島にある教皇領をローマを除いてすべて没収した。このため教皇ピウス9世との関係はギクシャクし教皇はイタリア王国と国交を絶っていた。

統一に貢献したもう一人の人物は、青年イタリア党のリーダーであるジュゼッペ・ガリバルディ（1807年～1882年）である。現フランス領のニースで生まれ、イタリア統一に絶大な貢献をした戦略家である。

ガリバルディの活躍は、1833年イタリア共和国を打ち立てる理想に燃えるジュゼッペ・マツイーニとジェノヴァで出会い青年イタリア党に参加することから始まる。

ガリバルディの統一に向けての行動の軌跡を辿ると、すべて個人のやむにやまれぬ気持ちから軍事行動を起こしていることがうかがえる。

1836年南米に渡りブラジルで生涯の伴侶を得た。ブラジルで義勇兵として独立戦争に従軍し、さらにウルグアイでも戦い、そこでゲリラ活動の戦術を身に着けた。革命家のチェ・ゲバラはガリバルディのゲリラ戦術を学んだといわれている。

1848年イタリアに帰国しフランス軍と戦い、ローマのジャンニコロの丘でフランス軍を破ったものの反撃にあい敗走し各地を転々とし、ついには共に戦ってくれた愛妻を戦死させてしまう。



余談だが、この時ジャンニコロの丘からフランス軍が放った大砲の弾丸が、映画ローマの休日の舞台となったコロナ宮の階段にめり込んでいるのを今でも目にすることができる。

1850年アメリカへ逃れる。1854年ヨーロッパに戻り、イギリスではフランス軍を破った英雄として名をはせている。イタリアに帰国し、終の棲家となるカプレーラ島の島半分を一族で購入し農業に従事するも、1856年再び義勇兵を組織し宿敵オーストリア軍と戦い勝利する。

1860年ガリバルディは義勇軍通称赤シャツ隊を指揮しシチリアを征服し、次いでフランスが支配するナポリへ進軍しここでも勝利をおさめた。

着弾した仏軍の大砲の弾

ガリバルディはヴィットーリオ・エマヌエーレ2世とまみえ、自身が征服したシチリアおよびナポリをサルディニア国王であるヴィットーリオ・エマヌエーレ2世に何ら見返りを求めず無償で献上したうえ、統一されたイタリア王国の国王は自分ではなく、ここにおられるヴィットーリオ・エマヌエーレ2世陛下だと宣言したのである。そして自身はカプレーラ島へ帰っていった。

1866年オーストリア領のヴェネツィアを奪うため、またまた義勇兵を集め参戦し勝利しイタリア領とした。

1882年余生を送っていたカプレーラ島で波乱に満ちた生涯を閉じた。自身は家族葬を望んだ

が政府は国葬をもって報い、遺骸はカプレーラ島に葬られた。

余談であるが、ガリバルディはアメリカの南北戦争の最中、北軍のエブラハム・リンカーンから北軍の司令官を引き受けてもらいたいと要請があったが条件が折り合わず実現しなかった。

イタリアは第 1 次世界大戦後共産主義が台頭し労働者のストライキが頻発した。国民の共産主義に対する期待は裏切られ、その失望は大きかった。

このような世情にタイミングを合わせて共産党打倒を掲げ頭角をあらわした人物がベニート・ムッソリーニ（1883年～1945年）であった。

ヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世国王の指示でファシスト党を中心とする内閣を組閣し次第に一党独裁の道を歩んでいく。

イタリア王国と国交断絶状態にあった教皇との関係はムッソリーニのラテラン条約で修復がなり、ムッソリーニはこれまで反目しあっていたローマ教皇庁との和睦を成し遂げ、ここにヴァティカン市国が誕生したのである。

ヴィットーリオ・エマヌエーレ 2 世は実権を失うが、ムッソリーニのファシズム（=結束主義）政権下でも権威として存続した。イタリア統一に関しては青年イタリア党のマッツィーニの功績も忘れてはならない。

イタリア王国は第 2 次世界大戦後、国民に王政の是非を問い国民投票により王政廃止が決定した。そして1948年、共和制の道を歩むこととなり現在のイタリアに至っているのである。